

二〇〇七年度本試験 第1問] 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 創作がきわだって個人的な作者、天才のいとなみであること、したがってそのいとなみの結実である作品も、かけがえのない存在、唯一・無二の存在であること、このことは近代において確立し、現代にまでうけつがれている。a ツウネンといっている。一方、このいとなみと作品のすべてが、芸術という独自の、自律的な文化領域に包摂されていることも、同じように近代から現代にかけての常識だろ**う**。かけがえのない個人的ないとなみと作品、それら**すべてをつつみこむ自律的な**——固有の法則によって完全にb トウギヨされた——領域。しかしよく考えてみれば、このふたつのあいだには、単純な連続的關係は成立しがたい、というより、むしろ対立する、あるいはあい矛盾する關係のみがある、というべきだろう。したがって近代的な**芸術理解**にとっては、このふたつの対立し矛盾する——個と全体という——項を媒介し、**連続的な關係に**もたらずものとして、さまざまなレヴェルの集合体 (Tensemble) を想定することが、不可欠の操作であった。c 芸術のジャンルが、近代の美学あるいは芸術哲学のもつとも主要な問題のひとつであったのも、むしろ当然だろう。個別的ないとなみや作品と全体的な領域のあいだに、多様なレヴェルの集合 (ジャンル) を介在させ、しかもそれぞれのジャンルのあいだに、一定の**法的な關係を設定することによって**、芸術は、ひとつのシステム (体系) としてとらえられることになるだろう。近代の美学において、「**芸術の体系**」がさまざまな観点から論じられたのも、これまた当然であった。

2 ジャンルは、個々の作品からなる集合であると**同時に**、個々の作品をそのなかに包摂し、規定する全体としての性質をももつ。個々の作品は、あるジャンルに明確に所属することによって、はじめて芸術という自律的な領域のなかに位置づけられるが、この**領域の自律性こそが**、芸術に特有の**価値 (文化価値) の根拠**でもあるのだから、ジャンルへの所属は、作品の価値のひとつの**根拠**ともなるだろう。ある作品のジャンルへの所属が曖昧であること、あるいはあるジャンルに所属しながら、そのジャンルからの規定にそぐわないこと——ジャンルの特質を十分に具体化していないこと——、それは、ともに**作品の価値をおとしめるもの**として、きびしくいましめられていた。

3 近代から**区別された現代**という**時代の特徴**として、しばしばあげられるものに、あらゆる基準**ないし価値基準の、ゆらぎないし消滅がある**。芸術も、その例外ではない。かつては、**芸術の本質的な特徴として**、その領域の自律性と完結性があげられ、とくに日常的な世界との距離ないし差異が強調されることが多かった。しかし現在、たとえば**機械的な媒体をとおして大量に**ルフするイメージなどのために、その距離や差異は解消の傾向にあるといわれる——**芸術の日常化**、あるいは**日常の芸術化**という現象——。芸術の全体領域そのものが曖昧になっているとすれば、その内部に想定されるジャンルのあいだの差異も、解消しつつあるのだろうか。たしかに、**いまの芸術状況をみれば**、かつてのような厳密なジャンル区分が意味を失っていることは、いちいち例をあげるまでもなくあきらかである。理論の面でも、**芸術ジャンル論や芸術体系論が以前ほど試みられないのも、むしろ当然かもしれない**。しかしすべての、あらゆるレヴェルのジャンルが、その意味 (意義) を失ったのではないだろう。無数の作品が、おたがいにまったく無關係に並存している**のではなく、なんらかの集合をかたちづくりながら**、いままお共存しているのではないだろうか。

コンサート・ホールでの演奏を中止し、ラジオやテレビジョンあるいはレコードという媒体を介在させて、自分と聴衆の直接的な関係を否定したとしても——聴衆にたいして、自分を「不在」に転じたとしても——、グレン・グールド (Glenn Gould, 1932-82) を、ひとはすぐれたピアノニスト (音楽家) とよぶのだし、デュシャン (Marcel Duchamps, 1897-1968) の「オブジェ」のおおくは、いま美術館に保存され、陳列されている。変わったのは、おそらく集合の在り方であり、集合相互の関係とそれを支配する法則である。たとえば、プラトンに端を発し、ヘーゲルなどドイツ観念論美学でその頂点に達した感のある芸術の分類、超越のない絶対的な原理にもとづいて、いわば「うえから」(von oben) 芸術を分類し、ジャンルのあいだに一定の序列をもうけるという考え方は、すくなくとも現在のアクチュアルな芸術現象に関しては、その意義をほぼ失ったといつていいだろう。たしかに、「分類」は近代という時代を特徴づけるものだったかもしれないが、理論的ないとなみが、個別的、具体的な現象に埋没せずに、ある普遍的な法則をもとめようとするかぎり、「分類」は——むしろ、「区分」といったほうがいいかもしれないが——欠かすことのできない作業 (操作) のはずである。

45 **4** 解説書風のきまり文句を使つていえば、グールドもデュシャンも、ともに「近代の枠組をこえようとする尖鋭ないとなみ」という点で、同類——同じ類 (集合) に区分される——ということになるが、にもかかわらず、グールドが音楽家であり、デュシャンが美術家であることを疑うひとはいないだろう。演奏するグールドの姿をヴィデオ・ディスクで見ることができるとしてこのことは、グールドの理解にとつては、その根本にかかわることなのだが——、それとともに、録音・再生された彼の「音」を聞かなければ、彼特有のいとなみにふれたことにはならないだろう。モニターの画面を消して、音だけに聞かせるとき、いくぶんかグールドの意図からははなれるにしても、そのいとなみにふれていることはたしかである。「聞く」という行為、あるいは「聴覚的」な性質を、彼のいとなみとその結果 (作品) の根本と見なすからこそ、ためらわず彼を音楽家に分類するのだろう。同じように、「見る」という行為と「視覚的」な性質が、デュシ

55 ても、「感性」にもとづき、「感性」に満足を与えることを第一の目的とするいとなみが——それを芸術と名づけるかどうかにはかわりなく——ひとつの文化領域をかたちづくることは否定できないだろうし、その領域が、「感性」の基礎となる「感覚」の領域にしたがつて区分されるのも、ごく自然なことであるにちがいない。ところで、同じ「色彩」という視覚的性質であっても、もちいる画材——油絵具、泥絵具、水彩絵具など——によって、かなりののはつきりと識別できる——ちがいが生じるだろう。「色彩」という感覚的性質によって区分される領域——絵画——の内部に、使用する画材による領域——油絵、水彩画など——をさらに区分することには、十分な根拠がある。「感覚的性質」と、それを支える物質——「材料」(matière, the material)——を基準とする芸術の分類は、芸術のもつとも基本的な性質にもとづいた、その意味で、時と場所の制約をこえた、普遍的なものといえるだろう。もちろん、人間の感覚は、時と場所にしたがつて、あきらかに変化を示すものだし、技術の展開にもなつて新しい「材料」が出現することもあるのだから、この分類を固定されたものと考えてはならないだろう。もつとも普遍的であるととともに、歴

65

史のなかで微妙な変動をみせるこのジャンル区分は、芸術の理論的研究と歴史的研究のいずれにとっても重要な意義をもつのもかもしれない。あるいは、従来ともすれば乖離しがちであった理論と歴史的研究を、新たなユウワにもたらず手がかりを、ここに求めることすら可能なものかもしれない。個別的な作家や作品は、

70

実証的な歴史的研究の対象となるだろうし、本質のないし普遍的な性質は、いうまでもなく理論的探究の対

象だが、個別と普遍を媒介する——個別からなり、個別を包摂する——集合としてのジャンルの把握には、

厳密な理論的態度とともに、微妙な変化を識別する鋭敏な歴史的なまなざしが要請されるにちがいない。

いずれにしても、近代的なジャンル区分に固執して、アクチュアルな現象をハイジヨすることが誤りであるように、分類の近代性ゆえに、ジャンル研究の現在における意義を否定しうることもまちがいだらう。

(浅沼圭司『読書について』)

○グレン・グールド——カナダのピアニスト。実験的な手法で注目されたが、一九六四年以後コンサート活動を止め、複製媒体のみの表現活動を行った。

○デュシャン——マルセル・デュシャン。フランスの美術家。「美術」という概念そのものを問い直す、多くの前衛的作品を発表した。

問1 「芸術のジャンルが、近代の美学あるいは芸術哲学のもつとも主要な問題のひとつであったのも、むしろ当然だろう」(傍線部ア)とあるが、なぜそのようにいえるのか、説明せよ。

問2 「かつては、芸術の本質的な特徴として、その領域の自律性と完結性があげられ」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

問3 「欠かすことのできない作業(操作)のほずである」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問4 「『感性』の基礎となる『感覚』の領域にしたがって区分される」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

問5 「厳密な理論的態度とともに、微妙な変化を識別する鋭敏な歴史的なまなざしが要請される」(傍線部オ)とあるが、どういうことか、全体の論旨に即して一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。(句読点も一字として数える。なお、採点においては、表記についても考慮する。)

問6 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ツウネン b トウギョ c ルフ d ユウワ e ハイジヨ

【全体的な戦略】

わりと込み入った理屈のあとに、なぜ新旧の具体例が挙げられるのか？

最初に述べあげた理屈について、筆者はどうオチを付けるのか？

↓ 本文は、「理屈を現代の視点で受け継ぐ文章」(∴ 問5設問、ex 8 ex 9やex 10)

「筆者の現代の視点」 + 「冒頭の理屈を再評価するポイント」 を先読みする

最終段落「芸術活動のアクチュアルな現象」

∥ ex 2 「現代」の特徴「日常の芸術化」

が、芸術面で現れたもの

ex 4 (媒体による複製の流通) と、それに乗

じる芸術家

「記録媒体」のみの音楽家グループ

「既製の工業製品」を飾る美術家デュシャン

※ 彼らは「なんらかの集合」を今なお形成しつつ共存

「感性」「感覚」を満足させる行為や性質を第一の目的とする現代の芸術のジャンル区分は、

ex 5 ex 8 グールドや ex 6 ex 9 デュシヤンを「ためらわず」芸術家に分類する

芸術哲学の主要問題「ジャンル研究」は、現在においても理論的意義がある

∴ →

ジャンルの「在り方」「相互関係」は変化したもの、ジャンルが「普遍的な法則」として機能していることには変わりがない

「近代」

美学・観念論哲学など、観念上の原理

(超越者の存在など)を絶対視し、それを

普遍性・本質として「うえから」規定

「現代」

感性↓感覚↓材質 芸術活動自体の

基本的性質にもとづく普遍性の規定

めらわず」芸術家に分類する

ジャンルの機能
(はたらしき・位置づけ)は健在

【解答するさいの難所】 ∴ 焦って問1を解くと、全体の解答の見通しが立たなくなる

問1 ジャンルの「近代における」重要性

【論点まとめ】

① 段落 (法則性が、個々の作品を全体に体系づける)

∴ と同時に ∴

② 段落 (ジャンル所属によって作品に価値が生じる)

問5

現代の作品と普遍を媒介する「集合」としてのジャンル

問3

芸術理論が求め続ける「分類」「区分」のための法則性

問4

芸術行為と作品の根本に認められる普遍的な性質

問2

ジャンルにかつて「上から」規定されてきた絶対性

(信仰や権力が、人為的に作品に与えていた普遍的な性質

論拠が混み合う∥ 理屈っぽい時こそ、文章全体で論拠がどんな伏線・継承関係を持つか知ることが大事

問1 「芸術のジャンルが、**近代の美学あるいは芸術哲学のもっとも主要な問題**のひとつであったのも、むしろ当然だろう」(傍線部A)とあるが、なぜそのようにいえるのか、説明せよ。

K 唯一無二の作品を芸術という全体の中で**価値**づけ、芸術を一つの全体的体系とするためには、**個と全体とを媒介するジャンル**が必要だから。

○傍線部Aを述べる1段落「と同時に」2段落の論拠も並列的に述べている

○解答の論拠の流れ全体を守るために潔く割り切り、1、2段落の論理それぞれに省略を入れている

△大きな目で見ると1、2段落の要約に過ぎず、本文論旨「現代芸術との対比」から説明してはいない
△1、2段落の論拠の構成を省略するなかで、3段落の **ex7** 「プラトン・ヘーゲルのうえから」分類 との**関連が捨象されている**

S 個を普遍へと媒介するジャンルを設定することで、**作品は個性を保持しつつシステム**のうちに**連続化**されるから。

△傍線部Aを述べる1段落の論拠の説明で(おそらく*意図的に)踏みとどまっており、2段落「芸術領域のもつ特有の文化価値」に触れていない **ex7** 「プラトン・ヘーゲルのうえから」分類 との**関連が全く見えていない**

△大きな目で見ると1、2段落の要約に過ぎず、本文論旨「現代芸術との対比」から説明してはいない

ex7 「プラトン・ヘーゲルのうえから」分類

|| 3段落 **ex7** 「ジャンルを**「うえから」**分類し**序列**を設ける法則」が、**近代の「基準枠」「価値規準」**であった

|| 1段落末(全体領域に介在させる多様なジャンルそれぞれに法則的な関係を設定すること)によって、「芸術は

一つのシステム・体系となる」

|| 2段落前半「芸術という自立的な領域の自立性」こそが、**芸術に特有の価値(文化価値)**の根拠でもある

—— 個々の作品にとつての、かつての「ジャンルの意義」

☆標準解答

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5 6 7 8

近代のジャンルは、美学が芸術に自律した価値の体系を与える
近代思想が 日常の世界から離れた、完結性・独自性のシステム・全体性を規準する
多様な価値のレベルに区分する
よく、個の作品を包摂し 序列に規定する ための絶対的原理だから。

a プラトンからヘーゲルまで**近代の美学や哲学において原理的に規定されていた**(1点)

b 近代にあつて**現代には存在しない、芸術と日常生活との距離ないし差異**

—— **独自性・自律性・完結性・非日常性・超越性・絶対性**(1点)

c 個々の作品と**全体の芸術という領域を媒介し、連続的な関係にまとめ上げる**(2点)

d ジャンルの、**個を包摂し規定する自律的で価値のある全体領域としての性質**(2点)